

ミシエル・オバマは中国で何を語ったのか

佐橋 亮

ミシエル・オバマは、アメリカのファーストレディーとして十九年ぶりとなる中国訪問を果たした。北京の国連世界女性会議において女性の権利と人権は不可分だと訴えたヒラリー・クリントンは、とにかく注目を集めた。他方でミシエルは、文化外交の枠から踏み出さずに、しかし自らの個人史と信念を語る形で、人権問題の解決、オープンなインターネットの重要性を訴えることになる。

「ミ

シエルが最近スタンフォードで講演したのを知っているか？」

春学期、米中関係史の講義初日。老教授は開口一番、こう切り出した。

ミシエルがこのキャンパスに来たのであれば、それこそ何カ月も前から学生の話題の的だ。しかし、そんなことは噂でも聞いたことがない。居合わせた学生たちは考え込んでしまった。得意げな顔で教授は続ける。

「彼女は、北京大学にあるスタンフォードセンターで講演をしたんだ。ホワイトハウスのHPにある、この写真を見てごらん。彼女の講演台の上、ほら白い壁に、君たちが見慣れたスタンフォード・ツリーが刻まれているだろう。」

三月二十二日の北京空港は、すっかり春の陽気だった。娘とともにタラップを降り

るミシエルは、アメリカのファーストレディーとして実に十九年ぶりに中国政府に歓待される。

ミシエルはアメリカ国内で人気が高いとは言え、最近では肥満対策キャンペーンを先頭に立って行っているイメージが強い。政治的な出番は控えめ、というのが一般的なイメージだ。そのため当初、今回の訪中の発表は少し意外な感じで受け止められた。オバマ大統領による日本、韓国、東南アジア歴訪の一方で、中国を軽視していないことを示すジュスチャーに過ぎないとも思われた。

蓋を開けてみれば、今回のミシエル訪中はなかなか面白い。たしかにこれは文化外交であり、習近平国家主席夫人の彭麗媛氏とのファーストレディー外交だろう。紫禁城や万里の長城を訪れ、卓球に興じ、高校生と太極拳のポーズを構え、そしてパン

ダに歓声を上げた彼女の行動は、それはそれで両国の国民に訴えるものがあつたにちがいない。習近平氏との面会までセットした中国政府には、この機会を米中関係の重要性を示す好例として利用する思惑も見て取れた。

北京大学スタンフォードセンターで行われた演説も、その大部分は学生に留学の重要性を説く、いわばありきたりの内容だ。カジュアルな装いで壇上に上がったミシエルの語り口は、とても柔かなものだった。中国大使に着任して間もない大物政治家のマックス・ボークスはスタンフォードの卒業生であり、上機嫌に見えたことだろう。

しかし、現実には（中国政府関係者にとつて）そこまで甘くなかった。

演説はネット規制の厳しい中国の現状に、冒頭から軽いジャブを放っている。「クリックひとつでアイデアが海を越える時代に

になりました。携帯メールでも、Eメールでも、スカイプでも、人々は異なった大陸とつながっています」。

そして演説のクライマックス、原稿で見ると九つのセンテンスにもわたって、ミシェルはオープンなインターネットの重要性、そして表現の自由、信仰の自由について語っている。

「私は夫とともに、多くの質問や批判を受けてきました。これは決して容易く乗り越えられるものではありません。しかし、私たち夫妻は、これが何物にも代えがたいものだと思っています。すべての市民の声、そして意見が聞き上げられてはじめて、国家は強くなり、繁栄するのです。私たちはそれぞれの文化や社会が持つ固有さには敬意を表しますが、自由に表現すること、自らの意志で信仰を持つこと、そして情報への自由なアクセスを持つことは普遍的に人々に与えられるべき価値だと信じます」。

この箇所が国営メディアによって流されることはなかったが、ネットの検閲は免れることになった。慎重に言葉が選ばれており、またオバマ夫妻の信念として語られたことで、中国市民の目から完全に遠ざけることは適切ではないと判断されたのだろう。さて、演説は以下のように続く。

「私たち夫妻は信じています。全ての人は、私がアメリカで与えられたように、そ

の人が持つ可能性を最大限に引き出すようなチャンスを与えられるべきだということ」。

三

シエル・ロビンソン・オバマは、人権状況の改善が意味することを体現した存在だ。公民権法以後のアメリカ社会の変革があったからこそ、輝かしいキャリアを歩んできた。シカゴ郊外の、貧しいアフリカ系アメリカ人の家庭に生まれながらも、プリンストン大学からハーバード法科大学院に進み、弁護士・大病院幹部として活躍し、バラック・オバマと暖かい家庭を築き、そして政治家となったバラックの夫人として、まさにアメリカを代表する女性となった。

その個人史と重ね合わせたとき、ミシェル発言は生活の苦境に苦しみ、出身に負い目を感じる多くの中国市民の心に強く訴える力があつただろう。そして、アメリカ市民や世界の人々にも、成長する中国に対してアメリカは人権という普遍的な価値観を決して妥協しないとのメッセージを、刺激のように思える。

もちろん、この演説はミシェル本人の考えだけで準備されたとは思えない。たとえ、今回の旅程終盤に成都を訪れたミシェルはチベット料理のレストランを利用して、これがアメリカ政府による、少数

民族問題への牽制球であることは明白だろう。

華やかな部分だけを切り取っても、まったく非の打ち所のない訪中として宣伝できる。同時に、目立たない形であっても、政治的メッセージも、あちらこちらに読み取れる。全てが成功だったわけではないが、今回の訪中は、実に外交のツボを押さえている。

別の言い方をすれば、ミシェル訪中は、「正常化」から三十五年を経た米中関係が変わらずに抱えるモメンタム（動力）とブレキを示した。米中両国の経済社会面での交流はとどまるところを知らない。国際政治においても中国との協調は不可欠だ。しかし、人権状況が改善しなければ、そして民主化が達成されなければ、理念に拠って立つアメリカという国は、結局のところ中国を異質なものと認識せざるを得ない。

冒頭に登場してもらった老教授は、こうも続けた。

「君たちはこれから米中関係の歴史を十八、十九世紀からだどっていくことになる。しかし、このミシェルによる演説は最初によく読んでおいて欲しい。君たちは気付くはずだ。米中関係は昔も今も、価値観の異なった大関係という点で何も変わっていないってことをね」。